

■ ■ 花の木 ■ ■

杖立伝説

花祭りの名称から、「はな」の語の絡んで、すぐ関連が考えられるのは伝説に名高い花

の木である。「はな」の木は、普通香花こうはなと言って仏に供えまた神祭りをする櫛しきみ または

榊さかき を言うものとは別である。信濃との国境に近い、北設楽郡豊根村字川宇連の、現在の

伊良神社の境内にあるものである。花の木は学名を「はなかえで」とも言うところがある。この花の木はいま花の木の自生地として、天然記念物に指定されていて、数本の大樹と、それに芽生えの若木が茂っているが、伝説によると、昔、伊良王という方がここに憩い給い、杖を地に挿しおかれたものと言う。しかし伊良王杖立の伝説の木は今はない。明治の少し前に、風損で倒れてしまった。根株がこれも一本の古い桧と抱きあい、枝と枝とが絡み合っ茂っていた。春四月中旬の花の盛りには、桧の緑の葉の中に、淡紅の花が映り咲いて、何とも言いようのない美しさであったと、土地の古老の物語である。それが明治の

少し前に、伊勢の御師おしから御神木にと望まれて、なにも知らぬ村のものは、わずかな金で桧の方を売ってしまった。桧を伐ると同時に、一方の花の木は、たちまち風のために損じてしまったと言う。この桧の樹を、一に「はぎこり」と言った

当時はもちろん伊良神社などと言うものはなかった。それで前にも言った通り、例年五月一日の祭りには、この根元で祭りがあった。そのおり唱える歌があって、

枯枝千本枝が千本二千本の枝……

と言うような文句であったが、いまではもう誰もこれを記憶しているものはないと言う。そうして花祭りの花と、この花の木との関連は、現在としては考えられない。もしあるとすれば、花祭りの以前の形式と、今一つ伊良という貴人の身の上においてである。

川宇連の花の木から、国境を越えて信濃に入ると、下伊那郡あさげ 旦開村にいの 新野〔現、阿南町〕であるが、ここにも村端れの道路脇に六本の花の木がある。これもまた伊良王との因縁を説いているが、川宇連のものに比しては、一段と木が若かったようである。

ちなみに川宇連は明治二〇年頃まではひどい僻村で、村のものは衣類なども、縞物、紺などはほとんど用いていなかった。大部分が白木綿か、さもなければ手製の藍で染めて、やっとな水色になったくらいのを仕立てて着ていた。これはいくらか豊かな生活をする

ものである。そうして日常茶を飲むには、茶桶ちやおけという直径五寸、深さ七寸くらいの桶があっ

て、この中に茶の葉を入れ、塩と湯を入れて、一流の粗末な茶筌で掻き回して飲んだ。来客があると、まず第一にこれを立てて、器に移して供したもので、これはこの地方一般の風であった。

花山天皇

尹良王の伝説から、「はな」の語に関連して、好一對のものは花山天皇の伝説である。はなやま
これはもうたびたび繰り返したからここには略すが、これも花祭りの「はな」と、根本は繋がっていたかも知れぬが判らぬ。しかしこの頃では、伝説の方が有名になって、その地

おおにゆう
名の大入 なども王入と記すようになった。

いま一つ花の語を言う地名に、振草村と御殿村の境にある花丸峠があるが、この名称の由来については私はまだ何も聞いてはいない。